



研究論文 (Articles)

中年期知的障害者の母親世代の課題：母親らの語りの分析から

平 本 憲 二

(京都橘大学作業療法学科, 大阪府立大学大学院人間社会学研究科)

Tasks of Mothers' Generational Inheritance as Reported by Mothers of Middle-Aged Offspring with Intellectual Disabilities: An Analysis of Participants' Life Stories

HIRAMOTO Kenji

(Department of Occupational Therapy Kyoto Tachibana University,

Graduate School of Humanities and Social Sciences, Osaka Prefecture University)

This study reveals the challenges of the maternal generation from the life stories of families with middle-aged children with intellectual disabilities families; it does so against the background of Erikson's (1959) theory of generativity. Generativity is a spiritual bond that occurs through interactions with people. Two mothers participated in the research, one in her 70s and the other in her 80s. We analyzed the life stories of the mothers according to a qualitative analysis, and 10 categories were extracted and correlated with generativity. In raising a child with a disability, the mothers experienced an inextricable relationship with their families and were unable to respond appropriately to the expectations of those around them. Over the years, they had to adapt to their surroundings, strive to maintain relationships with those around them in their relationships, and consider the nature of the relationship between themselves and their children with a disability as they aged and their health changed, forcing them to change their thoughts and actions so as to detach themselves from each other in order to relieve anxiety and loneliness. However, the mothers have been able to derive positive meaning from their actions among their families and their relationships with people. They have been interacting with others on the assumption that everyone can make their own demands, cooperate, and compromise. The mothers carved out their own relationships with people, and thus, their existence as mothers of individuals with disabilities. This identity is thought to have strengthened their values.

本研究は、中年期知的障害者家族のライフストーリーから、エリクソン（1959）の世代継承性理論を背景に母親世代の課題を明らかにした。世代継承性とは人々との交流によって起こる精神的結びつきのことである。対象は、70歳代と80歳代の母親2名である。母親らのライフストーリー結果を、質的分析を行ったところ、10個のカテゴリーが抽出され、世代継承性との関係づけを行った。母親らは、障害のある子を育てる中で、家族から孤立し、周囲からの期待に適切に応えられずにいた。また、長年、周囲との関係の維持に努め、高齢や体調の変化にともなう障害のある子と自身との関係の在り様を考慮しなければならず、不安や孤独の解消のため、障害のある子と自らを切り離すように、自らの考えや行動を変容せざるを得なかった。だが、母親らは、これまで家族間における自らの行動を肯定的に意味づけ、人々との間における自らの要求、協力、妥協といった行動は、誰にもあり得ることを前提にして、周囲との交流を行っていた。母親らは、自ら人々との関係を切り拓くことで、障害者の母親そして一個の人間としての存在価値を強めていったと考えられる。

Key Words : Persons with disabilities, Families, Life story, Generativity, Qualitative research

キーワード：障害者, 家族, ライフストーリー, 世代継承性, 質的研究

目的

本研究の目的は、中高齢期知的障害者の母親の家族や周囲との交流の関心と課題の実態を、Erikson (1959) による世代継承性を理論的背景にして明らかにすることである。

現在、障害者家族による介護殺人やネグレクトなどが社会において大きな問題となっている。一方で、長年、障害者家族間において関係を維持できているケースがある（厚生労働省, 2018）。今回、母親と母親をとりまく人々との間における様々な課題を明らかにすることで、高齢化する障害者（厚生労働省, 2018）の母親世代にある課題が新たに見出されると考えられた。

対象となる母親の選択理由は、障害者を自宅にて養育することが困難となり、医学的管理も必要となったため、障害者の入院を余儀なくされたが、数十年にわたり、障害者の世話をを行い、関係を維持できていることから、障害者家族間における結びつきの意義を明らかにすることが可能になると予測できたためである。

これまで、知的障害者の母親を対象とした研究では、大きく分けて次の2つがある。1つ目に、母親の直接のおよび家族間における困難をテーマにした研究がある。例えば、親の養育、家族間の連帯感、保護者としての役割、就労や貧困などに関わる問題、これに家族機能という観点加わり、親の様々な困難が生じることが報告されている（竜野・山中, 2016）。2つ目に、母親が受けられる社会的支援をテーマにした研究がある。例えば、母親の健康や貧困問題から、障害のある子の受けられる教育、福祉施設、親の会によるセルフヘルプグループ（竜野・山中, 2016）、行政（Pruchno, & Patrick, 1999）、介護（Freedman, Griffiths, Krauss, & Seltzer, 1999）、医療といった社会的支援の有効性（Hassall, Rose, & McDonald, 2005）、将来にわたる、障害者、きょうだいへの社会的支援の必要性（佐々木・大河内・田高・有本・伊藤・白谷・臺, 2016）がある。これらは、横断的かつ質的、量的研究によって明らかにされている。だが、先行研究では母親の年代が若年層中心であり、高齢化する知的障害者（厚生労働省, 2015）の母親

の発達課題である、家族や周囲との世代間にある課題を縦断的に明らかにしていないと考えられる。

高齢化する障害者の母親の家族や周囲との交流における課題を明らかにするためには、高齢の母親自身の主観的経験に焦点をあてた研究を重ねる必要があると考えられる。母親の主観的経験を明らかにするには、母親へのライフストーリー・インタビューが有効になると考えられる。また、高齢の母親世代にある、人との交流課題を明らかにするためには母親のライフストーリーの結果を世代継承性の理論と関係付けることが有効と考える。Erikson (1959) は、世代継承性を「成熟した伴侶たちは自分たちのパーソナリティとエネルギーを共通の子孫を生み出し育てることを結合したいと考え、この願望を基盤にして広がっていく」と述べ、人々の間に起こる精神的結びつきの実現化を強調している。世代継承性はErikson (1959) による、心理社会的発達理論における、中年期の発達課題に相当する。世代継承性は、人々の人生において、「子どもを育てる」、「親を介護する」、「介護される側に回る」といったことを祖父母から親、親から自分、自分から子へと、世代間を継続して循環的に働きかけることをいう（西平, 2013）。西平 (2013) は、現代社会においては、個人が自分の人生において、「自らのために」用いる権利と、「自分の前後の世代の人々をケアする務め」との葛藤、そのバランスをいかに取ることができるかが課題であり、世代継承性を明らかにすることは人々の世代間にある課題を表すことになることを示唆している。Erikson (1959) は、世代継承性の獲得を中年期（第7段階）の発達の課題に位置づけているが、宇都宮・渡邊 (2018) は、高齢期が世代継承を獲得する、第2のチャンスの時期と示唆している。

西平 (2013)、森岡 (2018)、岡本 (2018)、神谷 (2018)、やまだ (2018) による研究を検討し、Erikson (1959) による世代継承性は、次の過程で獲得されるとまとめることができる。1つ目に、「自己の形成」である。即ち、人は次世代のために知恵や所有物を引き継ぐうえで、危機的状況を体験して、周囲との折り合いをつけながら自己の形成（アイデンティティの獲得）を行う。2つ目に、「将来の予測を立てること」である。即ち、さまざまな社会集団の中で、過去の自ら

の経験を現在の事と擦り合わせながら将来の予測を立てる。3つ目に、「人生の新たな意味付けを行うこと」である。即ち、自ら生まれ育った土地の文化、親子、孫の世代間で起きた出来事、専門的技術の引継ぎといった多世代に渡る継承を行うが、それらは社会的文化的な複雑な形成過程をたどり、相手と語り聞く行為の中で気づかされ、新たな意味付けを行うことに繋げるということである。

即ち、以上を可能にするには、人が、人生上のさまざまな課題に対する困難や葛藤を経験できる機会をもたらされ、自身が創り出した成果を他者に引き継ぐことである。これにより、人は様々な危機を乗り越える力を養え、自らの感覚で得た経験を次の行動に生かしていくことが可能になる。

Keyes, & Ryff, (1998) は、Erikson による世代継承性の研究を実証的に発展させるための構造として、動機づけの源泉としての文化的要求、次世代への関心、内的な要求、思考と計画としての信念、積極的関与、行動としての創造性、意味付けとして物語ること（ナラティブ）の7つを示した。

ここで、岡本・大野・三好・茂垣・今井・赤木（2018）は、語り（ナラティブ）に関する課題で次の4点を挙げている。1つ目に、情報量が豊富で心理的メカニズムを把握できる有用性はあるが、サンプル数の問題があり、一般性の把握には困難である。2つ目に、本人の自己防衛による規制が働き歪曲を避けることができないため、客観的に判断できうるエピソードが必要となる。3つ目に、障害を有する子の家族の紆余曲折する人生が語られることが予想されるが、このことと家族のアイデンティティの獲得との関連性を検証する必要性がある。4つ目に、直接的な世代継承の物語であるかの検討として、ライフストーリー資料分析に立ち戻るプロセスが必要となる。

上記の課題において、1, 2点目のサンプル数の確保と自己防衛機制の解決による信頼性の向上については、実証論的な視点においては必須と言えるが、高齢の障害者家族における語りに関する研究はほとんどなく、情報量の積み上げとともに、出てくるサンプル一つ一つの検討と、対象者には無理に答えなくて良いという保証を与えておく必要がある。3, 4点目の母親の人生の出来事と自己の形成との関係に

ついては、対象者の長期的視点における人生にある複数の課題に対する心理的動きの捉えと、世代継承的な人物のライフストーリーの中にある、語りの意味の違いに細心の注意を払う必要がある。

ライフストーリーは一人の人生のヒストリーを語ることであり、人生のなかで起こった出来事と状況の時間的な連鎖をめぐって構造化されるものである（Bertaux, D. 1997 小林訳 2003）。ここで、田垣（2014）は、障害者のライフストーリー研究に関して、本人が体験した出来事の史的事実となるライフヒストリーよりも、本人の語りを中心に人生の経験的真實や解釈となるライフストーリーを重視する必要性を述べている。やまだ（2018）は、その人の語り直しが世代継承を強調できることを指摘している。田垣（2014）は、長期的な視点からみた障害者のライフストーリー研究が、障害者や慢性病に対する肯定的意味付けと否定的意味付け、あるいは両価の意味付けをとらえることを可能にすることを示唆している。また、詳細なライフストーリーが障害者の社会文化的に優勢な価値を検討していくことに有効となることを述べている。今回の母親の研究において、長期に渡り障害者に関わる家族に関するライフストーリーにおいても、障害者同様に、社会文化的に是認されている価値観との葛藤といった意味付けを明らかにすることが可能になり、これにより、母親世代にある課題の実態を明らかにすることが予測された。障害者の高齢の母親については、子どもの障害の程度、家族歴、職業歴の有無など異なる事例で、多様性を持たせたいうえで、既知の母親に再インタビューをして、その経験を詳しく語ってもらうことが妥当と考えられ、障害者の母親自身の家族や他の人々との交流において、どのような課題を有し、これまでの人生にどう影響を与えているかを明らかにする必要がある。

以上のことから、本研究の目的は、中年期知的障害者の母親の長期的視点における、人生にある複数の課題に対する、肯定的意味付けと否定的意味付け、あるいは両価の意味付けを明らかにするとともに、母親自身の他者との交流の中での創造的行動の有無と程度、新たな行動の意味付けを明らかにすることである。

方法

1. 対象と手続き

対象は、精神科病院に入院している中高齢期の知的障害を有する男性（以下、本人）2名の70歳代後半と80歳代後半の母親（以下、M1, M2）である。M1は、中等度の知的障害をもつ子の母親であり、職業歴はなく、家族構成は、父、母、本人、弟（結婚し別居）である。M2は、最重度の知的障害をもつ子の母親であり、職業歴は看護師、家族構成は、母、姉、本人である。母親らは、病院に定期的に面会に来て、本人の外泊を行い、積極的に本人を受け入れている。

筆者が勤務している病院は、重度の知的障害および発達障害者を受け入れて、精神科専門治療と看護といった包括的医療を実施し（厚生労働省, 2012）、家庭内復帰や社会復帰への支援を行っている。また、家族を対象とした、電話相談及び月1回の交流会、面会が行われている。

筆者は、研究対象の母親らとは、病院の作業療法を月1回（交流会、面会と同日になる）、母親に参観してもらうことで関係性ができている。また、母親らは、研究者である筆者から、研究の意義や手順について説明を受け、その際に研究協力を断っても不利益を被ることはないことも伝えられる。だが、そこから母親らが筆者の質問に無理に回答する可能性が考えられる。これを避けるために、筆者の研究主旨を第3者であるPSW（精神保健福祉士）に説明を行ってもらうことで、倫理的手続きに万全を期した。母親へのインタビューは長時間を要することが予測されるため、ICレコーダーへの録音を行うことの承認を得た。

インタビューの目的は、本人の母親の人生の過程において、家族や周囲の人々との交流の課題を明らかにすることである。そのために、母親のライフストーリーを半構造化面接によって尋ねた。その際、本人が母親の人生にどのように影響を与えたか、母親自身が家族や周囲の人々との交流にどのような関心を示していたかという観点から、就職、子育て、社会との交流と、それらの葛藤の有無、本人の母親であったことでの人生の選択、他の障害を持つ方

家族との交流、自らの今後の人生に関することの5つを質問した。

インタビューは、病院内の面接室で個別に行い、母親が積極的に話せるように、母親からの申し出を優先し、日時を設定した。調査期間は2018年7月から2019年3月である。インタビュー回数は一人3回で、1回のインタビューは40分から1時間を要した。

2. 分析

インタビューで得られた音声データを逐語化し、その後KJ法（川喜田, 1967）に準ずる分析を行った。KJ法のグルーピングについては、質的研究の経験者らの助言を得た。KJ法により、母親らによる多くの語り（情報）を効率的に整理し、その課程を通じて、新たに、高齢の母親の困難や葛藤、家族や周囲の人々との交流における課題を明らかにすることが予測できた。

KJ法は2人の母親それぞれで行った。まず、母親の逐語記録を意味のまとまりごとに区切り、M1は220個、M2は182個のコードを付した。次に、類似したコードをグルーピングして、グルーピングされたコードに表札をつけた。グルーピングされないコードはそのままとした。さらに、これらの表札と単独のコードをもとに、グルーピングを繰り返していった。その後、2人の母親のカテゴリーを統合して、最終的には10個のカテゴリーを得た（Table1）。

なお、コードからグルーピングされた表札を例示すると、M1の「家族会で、年1回の障害者（作品展）で自分の子の作品が出ていたら行く」、「困っている人がいれば助けてあげたいし助ける」、「障害をもつ子の家族には優しくしてきた」といったコードから、「自分にできることを探して参加したい」という表札を得た。M2の「障害をもつ子の家族には良くする責任がある」、「相手の話を聴く」、「私が終われば（亡くなれば）、次の人にバトンタッチでよい」といったコードから、「人々とのつながりを持ち続けたい」という表札を得た。さらに、M1の「他人に言うことはおこがましい」、「誰も自分には関心を持っていない」、「自分にできることを探して参加したい」という表札から、「自分にできることがあれば人々と

関わっていたい」という最終カテゴリーを得た。M2の「人々に影響を与えたい」、「人々は自分のことを気に掛けていない」、「人々とのつながりを持ち続けたい」という表札から、「自分のほうから人々と関わりたい」という最終カテゴリーを得た。M1とM2のカテゴリーを統合して、「自分の人々への影響を考えている」、「自分は人々から知られていない」、「人々と関わり続ける」という表札を得て、「人々と関わることの意味付けを行っている」という最終カテゴリーを得た。

次に、10個のカテゴリーの内容及び、カテゴリー間の結び付きを考え文章化した（Figure 1）。本研究は、筆者の所属する大学と病院の研究倫理審査委員会の承認を得て実施した（承認日：2018年7月17日）。

結果と考察

1. 母親自身の人生の選択のプロセス

KJ法によって生成された10個のカテゴリー（Table 1）は、これまでの研究で明らかにされている、「母親自身および家族間における困難と解決」、「母親の社会的支援を含めた周囲との関わり」と比較検討した結果、この2つのテーマに加え、新たに「障害者の母親としての自己選択」、「母親自身の社会的位置づけ」の2つのテーマが抽出された。4つのそれぞれのテーマについては、KJ法の結果に示される、どの下位カテゴリー（Table1のカタカナで示す）に相当するかを示しながら説明する。

（1）**家族内での母親の抱える困難や葛藤の繰り返し** 母親らは、障害のある子を育てる上で、夫と心的疎通を図り、本人、きょうだいに対する不安を回避していた（Table1－ア、イ、ウ、エ、以降のカタカナはTable1の記号である）。また、本人の高齢化や心身機能の低下を恐れ（オ）、きょうだいの優しく強い性格に触れ（カ）安心し、家族との安定した関係を築くことを切望し続けた。

これまでの母親研究（竜野・山中、2016；三原、2008；Rose, Nelson, & Hardiman, 2016；Smith, Tobin, & Fullmer, 1995）に示されるように、母親らには障害のある子との関りを維持すると同時に、家族との相互関係により、自らの抱える困難や葛藤

を解決していたと考えられる。

（2）**母親の社会的支援を含めた周囲との関わり** 母親らは、親戚や従妹による支持（キ）、同じ障害をもつ子の家族との交流における心理的揺らぎ（ク）、病院職員との安心した関わり（ケ）、大学病院や養護学校からの差別（サ、シ）、これまで本人に関する相談者となった周囲に対する、安心と不信（恐れ）という両価的感情を有しながら（コ）、周囲との適切な関係をとることに努めていた。

これまでの母親研究（竜野・山中、2016；Pruchno, & Patrick, 1999；Hassall, Rose, & McDonald, 2005；佐々木・大河内・田高・有本・伊藤・白谷・臺、2016）に示されるように、母親は自身と障害のある子、家族への支持に繋がる社会資源を求めていることが考えられる。障害者へのケア行為が社会と家族の多元的な担い手による分有になっていて（中根、2006）、母親への安心感をもたらしていることが考えられる。柳澤・綿（2010）は、障害児者の母親の子育てに関する支援のあり方は、母親の葛藤は早急に解決できるものではなく、また対処療法的に捉えるのではなく、長期的視点に立った支援がなされなければならないことを述べている。今回の研究対象の母親らに関しても、支援者の様々な視点から、情緒的理解と摩擦が生じやすく、適時に適切な対応が得られない限りは、困惑は解消されにくいことが予測される。原（2017）は、障害のある子にとっての生活の場、就労と生活費の確保、親が亡くなってからの解決に関するテーマが進展して、母親自身の変容を求めている。社会の常識（偏見）の根強さがあることを指摘している。このように社会の持つ概念によって、「母親一人で抱え込む」問題の解消は難しいことが予想される。

（3）**障害をもつ子の母親としての自己選択** 母親らは、高齢に伴う心身機能の低下に不安を抱えながら（ス）、親としての無力感を感じていた（セ）。だが、M1にあっては、障害への自己理解を深め（チ）、その答えが出ないにしても（ツ）、自らを信じ続けていた。M2においては、本人は自分しか頼れないと必死になり（ソ）、例え、限られた時間であっても（タ）、障害と向き合い続けた。また、資格にこだわらず精神科看護業務を務めるなど、社会との交流を

自己選択することに揺らぐことなく(テ)、母親らは、常に自らの生き方を模索していた。母親らは、自身を奮い立たせ(ト)、自らの経験で培った価値観を有していた(ナ)。また、自らの生きてきた時代を受け入れ(ニ)、M1にあっては、本人との関わりに関する証となる品を通じて自身を顧み(ヌ)、母親としての自分の姿を重ね見ようとしていた。

母親らは、孤独を経験し、自らの行動の変容を求められる中で、自らと障害のある子との生活経験を肯定し、その経験から得た新たな価値観を基に自己選択を行っていると考えられる。前盛・岡本(2007)は、母親が自身と障害のある子を一個の人間として認めるのは、自らの価値観や家族との関係によってなされるだけでなく、社会の中で見出されることを述べている。今回の障害者の母親らも、同様に、家族間および社会との交流により、孤独を避け、障害のある子も自身も、「個」として認め、社会の中で自らが他者から「もたらされる」だけでなく、他者に「もたらす」存在として考えることができたと推察できる。

(4) **自らの社会的位置づけ** 母親らは、本人の生命の尊厳が失われることを恐れ(ネ)、周囲の自身への見方をも恐れていた(ノ、ハ)。だが、母親らは、自身と障害のある子との関係を通じて、人々との関わりを止めず、社会的に弱められている人々のために協力することで(ヒ)、人々と関わることの意味付けを行っていた。

母親らは、孤独、虚無感、悲しみ、要求、協力といった感情や行動が、自分以外の他者にもあることを認め、自らを社会の中の一員として行動していることが考えられる。武藤・池田・圓尾・郷間(2008)は、母親にとって親密になれる友人(仲間)の存在が、母親の社会との関わりを促進させ、わが子を肯定的にみることができることを述べている。神谷(2018)は、母親の子ども以外の次世代育成に対する社会行動の可能性を挙げ、母親の利他的行動への欲求の高さとその実現が実証的に検討されている報告が多いことを述べている。今回の母親らは、障害のある子がいたからこそ、自らの社会的役割と価値を見出し、周囲との関わりの中で、それらを継承しようとしていたと考えられる。

2. 母親の人生の選択の過程と世代継承性との関係づけ

さらに、母親らのライフストーリーのKJ法結果の10個のカテゴリー間の関係を検討した結果、「家族や周囲との関係性」、「自らの生き方の模索」、「人々と関わることの意味付け」の3つの大カテゴリーが生成され、その大カテゴリーを表現する概念が、西平(2013)らによるエリクソンの概念と同様であり、各大カテゴリー間の関係を結びつけることでプロセスを図式化することができた(Figure1)。

(1) **「家族や周囲との関係性」と「自己の形成」** 母親らのカテゴリーにある、「家族との関係を築きたい」、「周囲との適切な関係を図ることに努めている」、「周囲から差別を受けた」は、「家族や周囲との関係性」にまとめられ、西平(2013)らによるエリクソンの概念の、「自己の形成」に相当すると考えられる。母親らは、常に障害のある子を通じて、夫やきょうだいに対する罪悪感を有し、家族一人一人の抱える困難を理解し、家族間の人間関係を柔和にさせることに努めていた。だが、母親らは、病院職員、きょうだいの支持が加わり自らの混乱を軽減させていたと考えられる。母親らは、孤独を有し、周囲に支援を求めつつも、障害に対する無理解、不信感情、妬みや恐れにより、心理的揺らぎを有していた。だが、母親らは、障害のある子を、自身からきょうだいや周囲に託す上で、家族や周囲との関係を断つことなく、折り合いをつけながら関係を維持し、自らの意思を再確認していたと考えられる。

小澤(2013)は、高齢者による次世代に渡す正の遺産と負の遺産を分別する自己物語がある点から、母親には子どもに託す局面が常に存在していることを示唆している。今回の母親らにも、障害のある子を通じて、心理的に揺らぎながらも、きょうだいに託す姿勢を持ち続けたと考えられる。深瀬・岡本(2010)は、母親自身の育児の成功による親役割としての区切りが世代継承に大きな影響を及ぼす点で、母親の育児の成功体験の機会の重要性を挙げている。今回の母親らにも、自ら一人で子を育てる「抱え込み」が生じた可能性は大きいですが、家族からの支持を得て、自らの子育てへの成功体験を積み重ねる機会を得たとも考えられる。これにより、母親らは、

Table 1 中年期知的障害者の母親のライフストーリーの KJ 法の結果

(1)家族との安定した関係を築きたい		
ア	夫と感情を共有したい	M1:夫に子育てを課せられ、それを責められ、(期待に) 応えられない。夫を弁護する。 M2:夫とお互いに慰めた。
イ	夫の性格に触れる	M1:夫は冷たく悲しい面がある。 M2:夫は気が小さい。
ウ	本人に対して不安にならないようにしたい	M1:本人には自分の思いがあり、障害者であることを良しとし、感謝がある。夫の分まで本人を愛してあげないといけない。障害で悲しみや困惑、葛藤がある。本人に対して弟に嫌われないようにさせる。(良くしてあげられない) 罪悪感がある。 M2: 本人は私の望みで、本人のために長く生き、本人にも生きていてほしい。良くしてあげたい。甘えてほしい。3 歳まで育ててよかったことはなく、別れることになり悲しい。病気をすると可哀そうになる。本人は高いところで活動するのが好き。(危なく) 目が離せない。障害によって辛い気持ちになる。本人を悲しませないようにする。腹が立つことがある。本人の私への気持ちをを知りたい。私と本人のどちらが先に死んだらよいか葛藤がある。姉との仲が心配だ。
エ	きょうだいに対して不安にならないようにしたい	M1:弟は私の希望。弟が福祉職に就いてくれてうれしい。弟が結婚し良かった。弟は本人を理解できている。弟は本人の心配の仕方がわからない。弟を信じている。本人のことで弟に頼れる。本人のことで弟に頼れない。弟には言える。弟には言えない。弟に対して良い悪い両方の思い出がある。弟に罪悪感がある。長生きして弟を安心させる。 M2: 姉は私の望みだ。本人の面倒をよく見る。本人を背負うことになる。本人を姉にしか頼れない。本人のことを話しかけてもらう。頼るのは良くない。本人を任せるのは可哀想だ。怒ってしまい罪悪感がある。良くしてあげたい。元気でいてほしい。本人との仲が心配だ。
オ	本人は高齢化し身体的にも機能が低下している	M1:本人は年をとった。年をとるとどうなるか。 M2: 生まれて2か月で(身体の状態が) 悪くなった。身体的に弱い。顔色が悪い。筋肉が細い。
カ	きょうだいの性格に触れる	M1:弟は優しい。弟は私を支えてくれる。 M2: 姉はしっかりしている。
(2)周囲との適切な関係を図ることに努めている		
キ	親戚やいとこが一緒にいてくれた	M1:本人といとこは一緒にいた。 M2: 身内を頼る。親戚は私の気持ちをわかっている。親戚やいとこに姉を助けてもらう。いとこは本人と姉によくしてくれる。親戚が近くに来てくれて安心する。親戚やいとこには頼れない。親戚がいようと遠慮する。親戚に本人を頼むか、後のことを悩む。
ク	同じ障害をもつ子の家族との関係は心理的に影響がある	M1:他の家族とともに過ごす。他の家族と会いたい。他の家族がいないと病院には来ない。他の家族といて喜べる。他の家族といることが自身にはプラスになる。家族会が早く終わってほしい時がある。 M2: 同じ障害をもつ子の親といつも一緒にいた。同じ障害をもつ子の家族とは言いたいことを言えた。遠方から子どもに会いに来る家族に対しては頭が下がる。同じ障害をもつ子の家族に対して気を遣った。
ケ	病院は常に関わってくれる	M1:病院が良い。本人を病院で預かってもらい感謝する。病院にしてほしいことがある。 M2: 病院とは長い付き合いになる。病院で(鉄棒で)懸垂させてもらっている。職員には特にしてほしいことはない。本人を預けている病院は安心する。
コ	周囲とは相互に良好な関係を保ちたい	M1:周囲から悪く言われるのではないかと不安になる。学歴のある人が悪いことをしてはいけな。本人に愛情を掛けてくれた人はいない。周囲の考えと私は違う。周囲から安心させてもらっている。周囲にしてほしいことがある。専門家より助言をいただきたい。 M2: 近所は本人のことを言わない。地域の人から本人の誕生祝いを受けた。本人の障害のことを、私も話さない。周囲の人の考えが私にはない。いずれ人に迷惑を掛けるだけ。世間に対して恥ずかしい。気持ちを開いて話せる。周りが助けてくれる。
(3)周囲から差別を受けた		
サ	大学病院から障害を告げられ落ち込んだ	M2:大学病院から本人の障害を告げられ落ち込んだ。
シ	養護学校から差別を受けた	M1:養護学校の先生から差別を受けた。
(4)高齢に伴う体力や健康上の不安がある		
ス	病気を患い、高齢に伴う体力や健康の不安がある	M1:膀胱炎のおべをした。難聴である。足が悪い。目が悪い。体が悪く自分のことで精いっぱい。 M2: 年をとった。癌を患った。ペースメーカーをしている。いつまで動けるか不安。

(5)自らの生き方を模索している		
セ	自分の力が及ばない	M1:私は役に立たない。親の資格がない。本人がいると家事ができない。今更やり直せない。時代を変えることができない。できないことだらけ。長く生きられないかもしれない。夫と子育てをしなければならなかった。自分を責める。 M2: 自分ではどうにもできない。親を見れば私は苦労していない。
ソ	必死になれる	M2:本人のことで必死になっていた。本人の将来は私にかかっている。強くいられる。
タ	時間が限られている	M2:私には時間が限られている。
チ	障害を何とかする	M1:障害について勉強しても変わらない。障害のことを勉強すれば楽になった。 M2: 障害を治したい。障害は治らないと諦める。
ツ	答えが出ない	M1:答えが出ない。考えると切りがたい。自身ではわからなくなっている。
テ	自分で考え行動する	M1:自分を信じて生きる。自分の考えがある。理想と現実とは違うと考える。よく言おうとは思わない。勤めはせず家事全般をした。家事が楽しい。(家事以外の)楽しみがある。本人を介護してきた。ほとんど私が本人と関わった。腹が立つことは忘れるようにする。長く生きる。頑張らないといけない。 M2: 昔からよくよしないで生きる。呆けずに長生きする。精神科医院で看護師の資格はなく、習いながら働いた。
(6)自分がしっかりしていなければならない		
ト	自分さえがんばればよい	M1:母である私は偉大だ。女のほうが強い。 M2: 自分が頑張ればよいという考えだ。
ナ	自らの考えを信じる	M1:大人は自分が愛されたいと思う。人は子どもを愛する。大人でも人とどう接してよいかわからない人がある。健康に生まれてもみんな同じという考えだ。健康者でも立派に育たなかったらみんな同じだ。親がいくら良く育てても立派に育たない子はいらぬ。メールではなく字を書くことが求められる時代が来る。 M2: 娯楽もなく生きるのが当たり前という考え。別に看護の仕事でないといけないというのはなかった。何をのりこえるということでない。親子なので本人とはお互いにどうしていくというのはない。
(7)生きた時代の社会的背景に影響を受けた		
ニ	生きた時代の社会的背景に影響を受けた	M1:ゆっくりできない時代に生きた。あつという間の人生だった。楽ではない。 M2:私は戦時中の子。いつか自分にも迎えが来る。戦争で命をなくすひとがいれば、防空壕に入り死を免れる人もいてそういう時代に生きた。
(8)思い出の物がある		
ヌ	思い出の物がある	M1: (本人との関わりのある) 思い出の物がある。
(9)本人のことが導い		
ネ	本人のことが導い	M1: きっと神様が、本人を私に授けた。 M2: 自らが生きる間の本人の命をつなぎとめていきたい。
(10)人々と関わることの意味付けを行っている		
ノ	自分の人々への影響を考えている	M1: 人に教えたなんてない。人に教えるほどのものはない。知識なんていうものはない。人に影響を与えていない。 M2: (他人がわからないことがあれば) 人に教えた。人に影響を与えたほうかと。人に教える仕事はしたい(今も)。人が知らないことが私にはある。
ハ	自分は人々から知られていない	M1: 私のことを覚えてくれる人はいない。周囲から評価されない。私をそんなに(社会貢献したと)誰もみない。周囲が私のことを(いろいろなことを)する人と思わない。 M2: 私が死んだら(私を)覚えてくれる人はいない。評価してくれない(と思う)。私が(貢献)したことを誰かの記憶には残らない。周囲が私を(いろいろなことを)する人とあまり思わない。
ヒ	人々と関わり続ける	M1:世の中の役に立てていない。自分には他人が発想することなどできない。家族会でも、年1回の障害者(作品展)で自分の子の作品が出ていたら行く。他人の面倒までは見られない。奉仕活動とかはしない。自分の子もできないのに他人の子の世話もできない。人から助言なんて求められない。人が困っていれば助ける。障害をもつ子の家族には優しくしてきた。人が悲しんでいれば慰める。相手の話は聴く。 M2:何か(障害のことで)集まる機会があれば参加した。誰もしないことをしてきたほうかな(と思う)。他人の面倒をよくみる。他人の子の世話もする。人から助言を求められる。人が困っていれば助ける。障害をもつ子の家族にはよくする責任がある。奉仕活動はそんなにしない。人が悲しんでいれば慰める。相手の話は聴く。私が終われば、次の人にバトンタッチでよい。

注. カタカナは、各下位カテゴリーを示し、母親らの語りを掲載した。同じ内容においては、語りを一定程度省略し、内容が多少変わったものは編集し、組み入れたことをあらわす。

個人の意志力を高め、自らの問題や葛藤と対峙することができたと考えられる。

(2)「自らの生き方の模索」と「将来の予測」 母親らのカテゴリーにある、「高齢に伴う体力や健康上の不安がある」、「自らがしっかりしていなければならない」、「生きた時代の社会的背景に影響を受けた」、「思い出の物がある」、「本人のことが尊い」、「自らの生き方を模索している」は、「自らの生き方の模索」にまとめられ、西平（2013）らによるエリクソンの概念の、「将来の予測を立てる」に相当すると考えられる。母親らは、障害のある子と自らの将来への不安、孤独、家族や人々との交流への関心、生命の危機的状況の体験、障害のある子と生きた事実の整理、障害のある子を手放すことの課題を有し、自らに責任を課す人生を送っていた。

高齢の母親には、障害のある子との関係において、不安と孤独を有していた。奥田・高野・池田・高田（2018）は、心身の病および戦争や災害などの危機的体験と人々に対する日常の感謝や未来の世代への関心の高さとの結びつきを挙げており、人々の自らの経験による心理的变化と世代継承の関係性を述べている。今回の母親らにも同様の経験があり、自らの将来を脅かす恐れのある危機的状況を知ることが変化に対応する原動力となり、自らで選択肢を拡大させ、現実検討につながれていると言える。M1にとっての「思い出の物」は、母親自身の障害のある子への不変の愛情を意味しており、過去の自分と子の精神的結びつきとなる媒体となっていたと考えられる。「本人のことが尊い」ことは、母親が子の生命の尊厳を周囲から傷付けられるのを恐れていたことが推測でき、自らと子を切り離す上で葛藤を有していたと考えられる。西平（2013）は、母親の世代継承性の高さの一つに、子離れすることの恐れを持たないことを述べている。今回の母親らにも、自らの子との葛藤はあったが、それに耐え、自らから子を切り離す勇気を有し、自身と障害のある子を、それぞれ「個」として認めていたことが考えられる。

(3)「人々に関わることの意味付け」と「人生の新たな意味付け」 母親らのカテゴリーにある、「人々に関わることの意味付け」は、西平（2013）らによるエリクソンの概念の、「人生の新たな意味付け」

に相当すると考えられる。母親らは、人々との間に起こる相互作用に関心を持ち、様々な場面での交流を望んでいた。母親らは、自身と障害のある子の高齢化に伴う心身機能の低下、自らが亡くなった後の子の生活に対する不安を有していたが、自らで対人行動を起こし、「母と子の関係」、「自らの社会の一員としての存在」それぞれを肯定する経験を積み重ねてきたと考えられる。母親らは、人生の様々な困難や葛藤を経験し理解できるがゆえに、他の困っている人々への関りの可能性を見出し、それを自らの強みとして持ち続けていると考えられる。

加藤（2012）は、障害者の母親には、混乱の中で、自身が母親になり、そして再び母親から自身へと還っていくプロセスがあることを述べている。今回の母親らにも、さまざまな混乱を経験する中で、母親としてのアイデンティティの獲得を基に子育てを全うし、また、一人の女性（個人）として自立的行動ができ、自らを他者のために役立てるといった2つの態度が交互に出現し、自らを成熟させていること（Erikson, 1959）が考えられる。

総合考察

1. 中年期知的障害者の母親世代の課題

今回の母親の研究で得られたデータ分析による結果と、世代継承性の理論からの考察を関連付けたところ、母親らの世代継承的行動、自身を立て直す過程、家族や周囲との交流の意義から、障害者の高齢の母親世代にある課題が新たに見出された。

(1) 自己の探求の継続 今回の研究対象となった母親の世代継承にある、「自己の形成」、「将来の予測を立てる」、「人々と関わることの意味付け」は、母親自身の「自己の探求」の継続となって表れていると考えられる。母親らは、親子間の親密さの乏しさ、周囲に対する対応への自信のなさ、将来への不安、自己形成への不安全感、課題吟味の乏しさ、孤独への恐れに悩むと同時に、困っている人々への世話、就労経験や家族会などの社会との関わりに、障害をもつ本人がいたからこそ可能になった人生上の意義を見出そうとしていると考えられる。母親は、家族や周囲と関わることで、自らの可能性を引き出し、人々

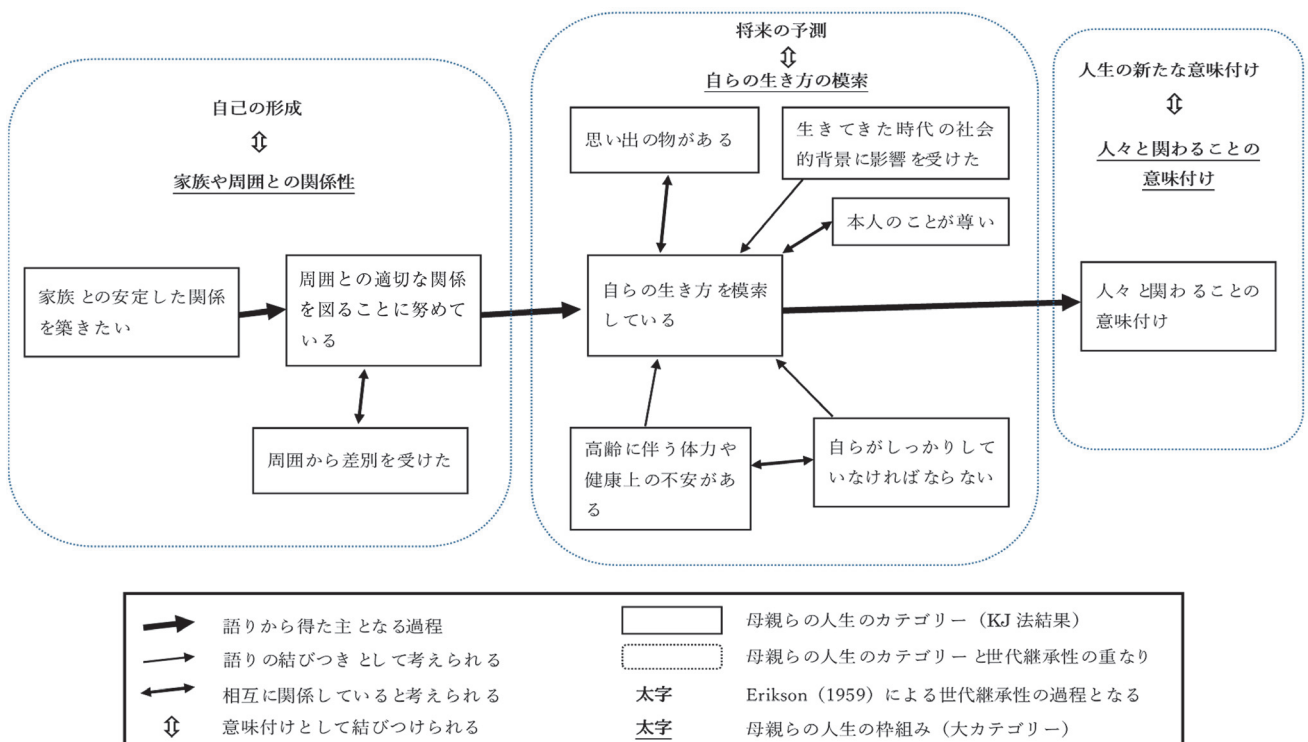
との相互関係によって得られる情報や刺激を期待し、常に自らに取り込むことができていたと考えられる。

丸島（2006）は、わが国の特徴として女性の世話の観念や世話行為に対する両価的自己評価があることを挙げ、女性の世話に対する達成の困難さを指摘している。田淵・三浦・中川・権藤（2013）は、母親の自らの人生の意味付けよりも地域との人間関係の行動の優先性を挙げており、母親が地域との人間関係の成否に直面化しやすく、社会文化的影響とともに、心理的に大きく影響を受けることを示唆している。今回の母親らにも、自身の障害のある子やきょうだいに対する世話、周囲からの評価によって心理的に大きく揺らいでいたと考えられる。岩崎・海蔵寺（2009）は、障害者の母親への就職を含めたソーシャルサポートが心理的負担を軽減させ、母親のアイデンティティの獲得と自己実現化に結び付けることを挙げている。今回の母親らも、自らが望む働きの方や他の家族との交流の機会を得られたことにより、自らの展望と可能性の獲得に努めたと考えられる。

(2) **生きていくための条件の整理** 母親らは、障害のある子を通じて、家族や周囲の人々との関係を維持すると同時に、自身の将来の方向性を探っていたと考えられる。母親らは、家族や周囲からの反応により心理的に揺らぎ、それに耐える力を持ち合わせ、自己の表出と妥協を繰り返してきたと考えられる。このことが自らを立て直す過程となり、自らのもつ感覚を鋭敏にさせ、新たな行動の基準をつくり、さまざまな課題に取り組むことができたと考えられる。即ち、母親自身は、さまざまな課題に直面し、心理的に揺らいだとしても、自らの生きていく術を信じ、人々との関わりの中でそれを生かしていくことを目指していたと考えられる。

Erikson（1959）は、創造による人格形成が将来自らの信念と共通する人々との共有につながることを述べているが、今回の母親らにも、自らの得た知識や生きる術を、自分だけに留めることなく、他者との交流の中で共有し実を結ぶことを目指していたと考えられる。

(3) **障害者の母親としての周囲との主体的な関係づくり** 高齢の母親の抱える困難さや葛藤の解決の過



程とニーズを明らかにすることは、母親の人生上の意義を見出すとともに、母親の生きていくための条件を示すことになると考えられる。今回、母親らの家族や周囲の人々との交流への関心や行動を、世代継承性を理論的背景として分析したことで、障害者の母親の世代にある課題を明らかにしたと考えられる。

母親らは、障害のある子を育てる中で、家族から孤立し、周囲からの期待に適切に応えられずにいた。母親らは、長年、周囲との関係の維持に努め、高齢や体調の変化にともなう障害のある子と自身との関係の在り様を考慮しなければならず、自らの考えや行動を変容せざるを得なかったと考える。だが、母親らは、自らの取る行動を作成し、改編を繰り返すことで獲得され（やまだ, 2018）、人々との間で起こる様々な課題を克服しようとしていたと考えられる。

岡本（2018）は、自らが生み出したものを育み次世代へ受け継ぐ営みと、自分の人生において何ものかを創造することの両者が入れ子のように関連し合い、世代継承性が達成されていくことを示し、世代継承性にはそれら2つの要素が相互に必要な不可欠であることを示唆している。やまだ（2000）は、世代継承における複数の物語化と自己の生成との関係性を挙げ、複数の人々との間に起こる様々な人生が自らの再構築に大きく影響を及ぼすことを述べている。今回の母親らは、これまで家族間における自らの行動を肯定的に意味づけ、人々との間における自らの要求、協力、妥協といった行動は、誰にもあり得ることを前提にして、周囲との交流を行っていた。母親らは、自ら人々との関係を切り拓くことで、障害者の母親そして一個の人間としての存在価値を強めていったと考えられる。

2. 今後の課題

中年期知的障害者の母親世代にある課題には、自己の探求の継続、生きていくための条件の整理、障害者の母親としての周囲との主体的な関係づくりがあり、母親らはそれらを人生において自身で創造してきたと考えられる。同時に、母親らの心理的揺らぎは、母親ら自らが人生の意義を再構成していく契

機となったと考えられる。

今後は、事例を増やして検討を重ねると同時に、中高齢期の知的障害者のきょうだいについても調査を行い、ライフストーリーから、家族や周囲の人々との交流の課題を明らかにして、母親ときょうだいの世代間に起こる相互作用を検討していきたいと考える。

文献

- Bertaux, D. (1997). *Les Récits de Vie: Perspective Ethnosociologique*. Paris: Editions Nathan. (ベルトール, D. 小林多寿子 (監訳) (2003). ライフストーリー—エスノ社会学的パースペクティブ—, ミネルヴァ書房)
- Erikson, E. H. (1959). *Identity and the Life Cycle*. New York: W. W. Norton, & Co. Inc. (エリクソン, E. H. 西平直・中島由恵 (訳) (2011). アイデンティティとライフサイクル 誠信書房)
- Freedman, R. I., Griffiths, D., Krauss, M. W., & Seltzer, M. M. (1999). Patterns of respite use by aging mothers of adults with mental retardation. *Mental Retardation*, 37, 93-103.
- 深瀬裕子・岡本祐子 (2010)。中年期から老年期に至る世代継承性の変容 広島大学大学院教育学研究科紀要, 59, 145-152。
- 原恵美子 (2017)。知的障害者とその家族への支援に関する一考察—知的障害者の母親の語りを通して— 愛知教育大学修士論文抄録。
- Hassall, R., Rose, J., & McDonald, J. (2005). Parenting stress in mothers of children with an intellectual disability: the effects of parental cognitions in relation to child characteristics and family support. *Journal of Intellectual Disability Research*, 49, 405-18.
- 岩崎久志・海蔵寺陽子 (2009)。軽度発達障害児をもつ母親の支援 流通科学大学論集—人間・社会・自然論—, 22, 43-53。
- 神谷真由美 (2018)。我が国における世代継承性研究の動向と展望 岡本・上手由香・高野恵代 (編) 世代継承性研究の展望, ナカニシヤ出版 (pp. 427-471)
- 加藤のぞみ (2012)。知的障がい児をもつ母親の内的変容—母子関係に着目して— 京都大学大学院教育学研究科紀要, 58, 327-339.
- 川喜田二郎 (1967). 発想法 中央公論社
- Keyes, C. L. M., & Ryff, C. D. (1998). Generativity in Adult Lives: Social Structural Contours and Quality of Life Consequences. In McAdams, D.P. & de St. Aubin, E. (eds.) *Generativity and Adult Development*:

- Psychosocial Perspectives on Caring for and Contributing to the Next Generation*. Washington, D.C.: American Psychological Association.
- 厚生労働省 (2012). 強度行動障害の評価基準等に関する調査について 報告書 Retrieved from http://www.mhlw.go.jp/file/06...12200000.../h24_seikabutsu-09.pdf (2017 年 7 月 1 日)
- 厚生労働省 (2018). 平成 28 年生活のしづらさなどに関する調査 (全国在宅障害児・者等実態調査): 結果一覧 Retrieved from https://www.mhlw.go.jp/toukei/list/seikatsu_chousa_c_h28.html (2020 年 6 月 1 日)
- 前盛ひとみ・岡本祐子 (2007). 重症心身障害児の母親における障害に対する捉え方と子どもの死に対する意識との関係 広島大学心理学研究, 7, 173-186.
- 丸島令子 (2006). 成人の心理社会的発達研究: Erikson 理論における「世代性 (generativity)」測定の試み: 世代性の関心, 行動, ナレーションから 人間科学科紀要, 2, 31-48.
- 三原博光 (2008). 高齢知的障害者に対する介護支援の検討 親の知的障害者の老後に対する介護ニーズ調査と知的障害者施設の事例を通して 介護福祉学, 15, 207-212.
- 森岡正芳 (2018). 意味構成の「ジェネラティヴィティ」岡本・上手由香・高野恵代 (編) 世代継承性研究の展望, ナカニシヤ出版 (pp. 31-43)
- 武藤葉子・池田友美・圓尾奈津美・郷間英世 (2008). 軽度発達障害をもつ子の母親の「わが子の障害」のとらえ方 ―子育てについての「語り」を通して― 教育実践総合センター研究紀要, 17, 59-66.
- 中根成寿 (2006). 知的障害者家族の臨床社会学―社会と家族でケアを分有するために― 明石書店
- 西平直 (2013). 5 ジェネレイショナル・サイクル: 先行世代との円環・後続世代との円環 京都大学大学院教育学研究科教育実践コラボレーション・センター総括報告書編集事務局 (編) 円環する教育のコラボレーション, 京都大学大学院教育学研究科教育実践コラボレーション・センター, (pp. 80-92).
- 岡本祐子 (2018). 21 世紀のアイデンティティと世代継承性―その視点と課題― 岡本・上手由香・高野恵代 (編) 世代継承性研究の展望, ナカニシヤ出版 (pp. 3-20)
- 岡本祐子・大野久・三好昭子・茂垣まどか・今井美智子・赤木真弓 (2018). McAdams による世代継承性に関する研究 岡本祐子・上手由香・高野恵代 (編) 世代継承性研究の展望, ナカニシヤ出版 (pp. 91-132)
- 奥田紗史美・高野恵代・池田龍也・高田純 (2018). 世代継承性に関する臨床的研究 岡本祐子・上手由香・高野恵代 (編) 世代継承性研究の展望, ナカニシヤ出版 (pp. 327-381)
- 小澤義雄 (2013). 老年期における世代間継承の認識を伴う自己物語の構造 発達心理学研究, 24, 183-192.
- Pruchno, R. A., & Patrick, J. H. (1999). Effects of formal and familial residential plans for adults with mental retardation on their aging mothers. *American Journal on Mental Retardation*, 104, 38-52.
- 佐々木理恵・大河内彩子・田高悦子・有本梓・伊藤絵梨子・白谷佳恵・臺有桂 (2016). 「親なき後」に向けた知的障がい者の生活場所を決定する渦中にある高齢期の母親の思い 日本地域看護学会誌, 19, 41-49.
- 田淵恵・三浦麻子・中川威・権藤恭之 (2013). 高齢者における世代性 (Generativity) と次世代との関わり行動の因果関係―性差に着目した検討― 日本世代間交流学会誌, 3, 35-40.
- 田垣正晋 (2014). 脊髄損傷者のライフストーリーから見る中途肢体障害者の障害の意味の長期的変化: 両面的視点からの検討 発達心理学研究, 2, 172-182.
- 竜野航宇・山中冴子 (2016). 障害児のきょうだい及びきょうだい支援に関する先行研究の到達点 埼玉大学紀要教育学部, 65, 81-89.
- 宇都宮博・渡邊照美 (2018). 高齢期・定年退職期の世代継承性 岡本・上手由香・高野恵代 (編) 世代継承性研究の展望, ナカニシヤ出版 (pp. 133-175)
- やまだようこ (2000). 人生を物語ることの意味 やまだようこ (編著) 人生を物語る―生成のライフストーリー, ミネルヴァ書房 (pp. 1-38)
- やまだようこ (2018). Erikson の人生と生成継承性 (ジェネラティヴィティ) 岡本・上手由香・高野恵代 (編) 世代継承性研究の展望, ナカニシヤ出版 (pp. 91-132)
- 柳澤志萌・綿祐二 (2010). 知的障害児の母親の葛藤とその支援の在り方に関する研究 文教学院大学人間学部研究紀要, 12, 79-96.

付記

本研究にご協力いただきました協力者の皆様に感謝いたします。

(2020. 5. 8 受稿) (2020. 10. 29 受理)

(ホームページ掲載 2020 年 11 月)